

---

# 引越し前夜

南 晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

引越し前夜

### 【Nコード】

N7304N

### 【作者名】

南 晶

### 【あらすじ】

先に書きました「ラビリンスで待つてて」の番外編です。

できたらそちらを先読んで頂けたら分かり安いと思います。

**（前書き）**

そのまんま引越し前夜のお話です。

「じゃあ、とりあえず引越しも終わったし、乾杯！」

オレは生ビールのジョッキを掲げた。

「ありがとな。坂本。車出してくれて。」

圭介はにつこり笑ってジョッキを掲げた。

一氣の口に流し込む。

二人だけで三階のマンションから荷物を出して、東京までトラック飛ばして、二階の社宅に荷物搬入して、トンボ帰りしてきた。

三月でもオレ達は汗だくで、トラックを返した後、この居酒屋に飛び込んだ。

「この借りは返すからな。助かったよ。」

こいつ、市役所にオレと同期で入社した高田圭介は僅か二年で貿易会社に転職が決まって、アメリカ行くなりしい。  
どんだけ頭いいんだ。

しかも背が高くて、顔も何とか言う今流行りの俳優に似てる。

男のオレが見てもイケてて、でも弱点が全く無くて、可愛い気がないんだよな。

「いいよ、礼なんて。それよりオレ、ショックだったんだぜえ。」

オレはタバコに火をつけた。

「オレお前のダチだと思ってたのに、転職するなんて聞かされてなかったし。相談くらいしてくれてもいいじゃん。」

「あ、ごめん。でも、あんまり人に言ってなかったんだ。」

圭介はいたずらした子供みたいに首をすくめて見せた。

こういうヤツに女は弱いんだろうな。

何度、こいつにアタックした女どもが玉砕していくのを見たことか。

こんなにいけてるのに、付き合ってる女の噂は全くなかった。

だから、みんな影では言ってるんだ。

高田圭介はゲイだって。

それだったら、ダチならカミングアウトしてくれてもいいじゃないか。

オレは最後の土産につっこんでやることにした。

「じゃあさ、感謝しなくてもいいから、お前の秘密話せよ。」

オレはニヤニヤしながら少し意地悪く言った。

もちろん冗談だ。

だが、圭介は飲みかけてたビールを吹き出して咳き込んだ。  
すごい動揺ぶりだ。

これはまさかホントにゲイ・・・？

「ひ、秘密？な、何で？そんなのないよ！」

圭介は口の周りを腕で吹きながら笑った。

絶対あるのがバレバレだ。

「圭介、オレはダチだろ？しかも、お前は明日東京に行く。最後に心許してもいいじゃねえか。」

オレは圭介の肩を叩いた。

それを聞いて圭介は意外にも真面目な顔で考えた後、言った。

「そうだな。お前には言わなくちゃ。誰にも話す気なかったんだけど。」

「ああ、言ってみろ。でも、多分皆知ってるぞ。」

オレが言った途端、圭介はええっ！！！！と言って絶句した。

「な、何で皆知ってただよ？」

「そりゃ、お前がそれっぽく見えるんじゃないか？」

「オレがそれっぽい・・・？」

圭介の顔が蒼白になっていく。

「心配するな。最近はそっち系の芸人もいるし、よくあることだろ？」

「どんだけびつくりしてんだ？と思いつつもクールな圭介が動揺するのが面白くなってきた。」

「よくある？いや、滅多にないだろ？そんなにあつたら日本の将来はどうなるんだよ？」

圭介は青い顔で呟く。

まあ、男同士じゃ子供は作れないが。

「大袈裟だな。どのみち少子化だからしょうがないさ。」

「・・・リアルだね。で、それ聞いてどうする？坂本。オレのこと通報するか？」

圭介は探るようにオレを睨む。

「・・・通報ってどこに？」

「警察だよ。だってオレは犯罪者だ。」

思いつめるにも程がある。

オレは溜息をついた。

「そんなのは趣味のうちだ。外国じゃ結婚が認められてんだ。大したことじゃないよ。」

「ええっ！！そ、それはないでしょ？」

「あるって。だからお前も堂々と愛し合えばいいんだ。」

もう、なんかめんどくさくなってきた。

こいつ頭がいいのか悪いのかよくわからん。

「まあ、今夜は飲もうぜ。」

「・・・坂本。」

圭介は訴えるような顔でオレを呼んだ。

「お前はオレがそういう趣味だって分かってて付き合ってくれてたんだな。」

「まあ、うすうすな。でも、気にしねえよ。そんなこと。」

オレはタバコの煙は吐き出した。

圭介は真面目な顔で続ける。

「オレとあいつは結婚できないけど、オレはあいつを守って行くってきめたんだよ。」

「いいじゃん。その決意が大事だ。相手が誰であろうとな。」

「サンキュ、お前いいやつだな。」

圭介はにっこり笑った。

その気が全くないオレは少し鳥肌が立った。

こいつマジで・・・？

ちょっと怖いじゃないか。

「ま、まあ、飲もうぜ！東京でも頑張れよ！」

「おう！」

そうして居酒屋の夜は更けていった。

<完>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7304n/>

---

引越し前夜

2010年10月10日04時49分発行